青年期におけるアタッチメントと就学前の母子関係

○岡島泰三¹・上野永子¹(非会員)・桂田恵美子²

(¹関西学院大学文学研究科・²関西学院大学文学部)

キーワード: アタッチメント 幼少期の母子関係 青年期

Attachment in adolescence and mother-child relationships in the preschool period

Taizo Okajima¹, Noriko Ueno^{1#}, and Emiko Katurada²

(¹Graduate School of Kwansei Gakuin Univ., and ²Kwansei Gakuin Univ.)

Key words: attachment, mother-child relationships in preschool, adolescence

目 的

Bowlby (1969) は、個人が幼少期のアタッチメント関係に基づいて、内的作業モデル (IWM) を内在化すると示唆した。Collins & Read (1994) は、この IWM には、アタッチメントに関連した記憶が含まれることを示唆している。すなわち、青年期において、安定した内的作業モデルを持つ個人は、それ以前のアタッチメント関係において、ポジティブなものであったと記憶し、不安定な内的作業モデル (Avoidant 型と Ambivalent 型) を持つ個人は、それ以前のアタッチメント関係において、ネガティブなものであったと記憶していると考えられる。Hazan & Shaver (1987) は、Secure 型の人は、Avoidant 型や Ambivalent 型の人より、両親との関係を愛情があり温かいものであったと想起することを示した。我が国では、酒井 (2001) が、Batholomew (1990) を参考に作成された“愛着関係における自己評価”と“愛着関係における他者評価”という 2 次元からなる尺度と、就学前の母子関係の回想との関連の検討を行っており、就学前の母子関係の回想とアタッチメントに関連する自己評価、および、他者評価との関連が示されている。現在、青年期以降のアタッチメント研究は、その関係に特化した様々な尺度 (例えば、恋愛関係に関連するものや親子関係に関連するもの) が作成されている。そこで、本研究では、一般的対人関係におけるアタッチメント、および、恋愛関係に特化したアタッチメントと就学前の母子関係の回想との関連を検証することを目的とする。

方 法

被調査者 本研究は、関西および関東の大学生 258 名 (男性 52 名、女性 206 名) を調査対象者とした。被調査者の年齢は 18 歳〜23 歳、平均年齢は 19.3 歳 (SD=1.09) であった。測度 本研究では、一般的対人関係のアタッチメントを測定するために強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度 (戸田, 1988) を、恋愛関係に特化したアタッチメントを測定するために日本版 the Experiences in Close Relationships (ECR; 中尾・加藤, 2002) を、就学前の母子関係を測定するために就学前の母子関係尺度 (酒井, 2001) を用いた。この尺度は安定的な母子関係、拒否的な母子関係、アンビバレントな母子関係の 3 つの下位尺度から成る。

手続き 本研究では、講義の一部を利用し、上述の質問紙を実施した。欠損値が 1 つの場合は最頻値を入力し、2 つ以上ある場合は分析から除外した。有効回答率は 97.7% であった。

結 果

一般的対人関係におけるアタッチメントスタイルの分類: 本研究では、強制選択式のアダルト・アタッチメント尺度を用いて、アタッチメントスタイルを測定した。強制選択式の尺度において、Secure 型は 178 名 (男性 31 名、女性 147 名)、Avoidant 型は 50 名 (男性 14 名、女性 36 名)、Ambivalent 型は 30 名 (男性 27 名、女性 3 名) であった。アタッチメントスタイルと就学前の母子関係: アタッチメン

トスタイルの違いが就学前の母子関係における回想に影響を与えるのかどうかを検討するために、一元配置の分散分析を行った。その結果、就学前の安定的な母子関係の回想においてはアタッチメントスタイルによる有意な主効果が認められた ($F(2,255) = 4.88, p < .01$)。多重比較を行った結果、Secure 型の人 ($M = 4.73, SD = 0.77$) は、Avoidant 型の人 ($M = 4.34, SD = 0.78$) や Ambivalent 型の人 ($M = 4.55, SD = 0.87$) より、就学前の母子関係において安定的な回想を示した。一方、就学前の拒絶的、および、アンビバレントな母子関係の回想において、アタッチメントスタイルによる有意な違いは認められなかった。

日本版 ECR と就学前の母子関係: ECR の下位尺度の得点と就学前の母子関係の回想との関連性を検討するために相関分析を行ったところ、ECR における見捨てられ不安と就学前のアンビバレントな母子関係の回想との間に弱い正の相関が見られた ($r = .18, p < .01$)。一方、ECR の親密性回避得点と就学前のアンビバレントな母子関係の回想との関連には、有意な関連は認められなかった。また、ECR の両尺度と、就学前の安定的な母子関係の回想、および、拒絶的な母子関係の回想との間に有意な関連は認められなかった。

考 察

本研究では、一般的対人関係におけるアタッチメント、および、恋愛関係に特化したアタッチメントが、就学前の母子関係の回想と関連するかを検証した。青年期における強制選択式の Secure 型アタッチメントスタイルは、就学前の安定した母子関係の記憶と関連しているようであった。また、ECR の見捨てられ不安は、就学前のアンビバレントな母子関係の記憶との関連を示した。この結果は、Hazan & Shaver (1987) や酒井 (2001) の結果と一致するものである。しかし、本研究では、Avoidant 型アタッチメントスタイル、および、恋愛関係における親密性回避尺度と就学前の拒絶的な母子関係の記憶との関連は示されなかった。Avoidant 型アタッチメントスタイルを持つ個人は、ネガティブな記憶である就学前の拒絶的な母子関係の記憶にアクセスすることを防衛したのかもしれない。また、青年期の Avoidant 型アタッチメントスタイルには、幼少期の母子関係以外の関係が大きく関わるのかもしれない (例えば、父子関係や後の友情関係や恋愛関係)。

また、本研究では、強制選択式アダルト・アタッチメント尺度で測定されたアタッチメントスタイルを用いた結果と、ECR で測定された特性であるアタッチメントセキュリティを用いた結果とでは、一貫した結果が得られなかった。Crowell, Fraley & Shaver (2008) は、異なるアタッチメント測度のそれぞれが、互換性のあるものではないと示唆している。すなわち、測定されているアタッチメント領域が異なれば、関連する変数も異なるのである。今後の研究において、各測度とそれぞれの関係の記憶について検証する必要があると思われる。